

蘇州古典園林の調査報告

金 孝珍

今回の調査は 2023 年 12 月 25 日から 28 日の 3 泊 4 日にかけて、中国蘇州に残る唐代から明代までの庭園の実地調査を行った。特に詩題に選ばれるような「名所」のイメージが庭園の中でどのように再現されているのかという点に重点を置いて調査を行った。海外調査のため行きの 25 日と 28 日は移動のため調査ができず、26 日・27 日の 2 日間調査を行った。両日にかけて調査したところは以下のようである。

- 〈12 月 26 日〉 1. 拙政園
2. 蘇州園林博物館
3. 獅子林
- 〈12 月 27 日〉 1. 香山（太湖）
2. 西山（太湖）の林屋洞
3. 滄浪亭
4. 唐少傅白公祠

拙政園

まず、26 日に調査した拙政園は明代の 1510 年頃、役人王献臣が官職を辞して故郷に戻って作ったものである。庭園の名称から読みとれるように王献臣の政治に対する不満が表れている。庭園の名は西晋の潘岳の詩「閑居賦」の「庶浮雲之志。築室種樹。逍遙自得。池沼足以漁釣。春稅足以代耕。灌園鬻蔬。以供朝夕之膳。牧羊酤酪。以竣伏臘之費。孝乎惟孝。友于兄弟。比亦拙者之爲政也」最後の部分にある「比亦拙者之爲政也」の語句からもってきたもので、王献臣が詩人潘岳のように政治から離れて隠逸生活を楽しむために作ったことがわかる。

拙政園は 5.6 ヘクタールの面積でもっとも広く東部、中部、西部に分かれていた。とくに中部庭園からは、庭園の 2 km ぐらい先の「北寺塔」が見えて庭園の景色の一部となっていたが、これは中国庭園の「借景」という方法の一つであることがわかった。

また中部庭園には書斎に当たる「見山楼」があった。調べたところ、この「見山」は東晋の詩人である陶淵明の詩「採菊東籬下。悠然見南山。」から取ったものであった。陶淵明のこの詩は隠逸生活を詠んだものである。蘇州は平地な地方で山がなく、「見山楼」からは実際に見える山はない。庭園の中に人工の小さい山があったが、これを陶淵明の詩の「南山」にたとえたと思われる。

中部庭園にある「遠香堂」は応接間にあたる建物だが、この扁額は明代の詩人画家である文徵明が書いたものだという。文徵明は王献臣と同じく蘇州出身で王献臣とは竹馬の友

で、腐敗した政治から離れて故郷に戻って書画を楽しみ余生を送ったと知られている。

拙政園は広大な池の中にいろいろな建物と橋があり、まるで海原と港町を連想させていた。特に池の中に建っている「香洲」の屋根は船の形をしており、海に浮かぶ船を連想する意図的な作庭であることが実際みてわかった。

拙政園は西晋の潘岳や東晋の陶淵明など、特に隠遁生活を詠んだ詩句の一部を庭園の名所や建物の名にしており、その詩句のイメージを投影しようとしていたことがよくわかった。

獅子林

獅子林は元代僧侶天如和尚が自分の師匠を記念するために作った庭園、もとの名は「師子林」であったという。「獅子林」に名が変えられたが、庭園を建てた天如和尚が浙江省西天目山獅子岩で修行したことによる説と、庭園の中には太湖から持ってきた奇石が配置されているが、その形が「獅子」の形をしていたので、「獅子林」と改名されたという説がある。

庭園には「太湖石」を積み重ねた作った築山・石假山がいたるところにあり、険しい岩山が庭の中にあるようだった。「太湖石」は太湖の水で浸食されてできた石灰岩だが、獅子林のように幾十も重ね高く積み上げた築山の形にしたものは大変珍しいという。奇石は獅子の形だけではなく、亀、魚、鳥など様々なものを連想させていた。

築山の南側には湖心亭があり、この湖心亭の左側に「暗香疏影楼」があったが、これは北宋初期の代表的な隠逸詩人林逋の詩「山園小梅」の「暗香浮动月黄昏。霜禽欲下先偷眼」からとって名づけられたことが分かった。また、暗香疏影楼の前には船の形をした「石舫」があったが、こちらは拙政園にあった「香洲」（画舫（屋形船のような建物））と似ていた。後で調べたわかったことだが、石舫とは、山東出身の方士徐福が秦の始皇帝の政治から逃げられるために、不老不死の薬を探しにいくという名目で大きな船を建造させ、人々を連れて始皇帝から逃げたという伝説の船をイメージして作られたものだという。つまりこの石舫は東方の桃源郷である蓬莱山に向かう船を見立てていることになる。元来、庭園の池や中島は蓬莱山を模したものであったこととも一脈通じるものがある。

獅子林の回廊沿いに植えられた竹林や古五松園、小庭園は太湖石の築山や池周りの庭園の派手な雰囲気から一変して、静寂の美を感じさせるものだった。同じ太湖石を使っているが配置によってまったく雰囲気が異なっていた。

太湖

27 日には太湖の西山の太湖石でできた「林屋洞」と蘇州の庭園「滄浪亭」、白居易を祀っている「唐少傅白公祠」を調査した。

太湖の西山は太湖七十二峯のうち、四十一の峯がある太湖のもっとも大きい島である。西山の南東のさきに「石公山」があったが、こちらは太湖石で山ができていた。白居易を

はじめとして陸龜蒙や皮日休などの唐代の詩人が訪ねて詩を詠んだところとしても知られている。太湖から産する太湖石による奇岩の造園は蘇州の古典庭園の大きな特徴であるが、太湖石に魅了された最初の人物は白居易であるとも言われる。白居易は杭州刺史を辞す際に西湖湖畔から産した天竺石を一つ、また蘇州刺史を辞す時には太湖石を五つ、それぞれ洛陽履道里の自宅の庭園に持ち帰り、これらの石を賞玩しながら往時をしのび晩年を過ごしたという。晩年に「太湖石記」という作品が残していることから白居易が太湖石に深く魅了されていたことが窺われる。各地の特産である珍しい石を庭に配置することは、白居易の石への愛着を示すだけでなく、それらの石を通して西湖や太湖といった名所の風景を庭園に取り込むことを意味ものと考えられる。そうした庭園を眺めながら、白居易は隠遁の中に詩情を愉しんだのであろう。庭園に名所を取り込み、詩情に浸る文学的な営みが唐代の詩人に見られることは、名所を模して造られた日本の寝殿造りの庭園を考える上でも示唆に富むものと言える。

西山にある林屋洞は石灰質の地層を地下水が溶かして作られた洞窟だが、昔は龍が住んでいたという伝説がある。道教の聖地で、漢代には道教家が隠棲しながら修行をした場所だったという。

滄浪亭

次に、滄浪亭は蘇州の中では最も古い庭園の一つで、唐末の錢元僚が造営したものを、1044 年（北宋慶曆年間）に詩人蘇舜欽が改築したものである。滄浪亭という庭園の名前は屈原の『楚辞』「魚夫」という詩から名づけられたことはよく知られている。滄浪亭は運河に沿って建てられており、運河沿いの回廊の曲線が自然の中に溶け込んでいた。回廊は上下左右の起伏に富んだ爬山廊で、壁には円形や扇形、六角形、瓢箪型、木の葉形などなど様々形をした漏窓があり、外の景色を取り入れており、それが庭園の一部となっていた。漏窓は江南庭園の中でも、特に蘇州において発達したと言われており、その代表的な庭園が滄浪亭だという。滄浪亭は造られた当時は現在の 6 倍の広さだったという。庭園の中には築山があったが、獅子林のように太湖石を何重も高く重ねたものではなく、築山の道に沿って太湖石が置かれており、獅子林とはまったく異なる静寂は雰囲気醸し出していた。築山の上にある楼閣の名が「滄浪亭」だが、ここから庭園を一望できようになっていた。

中国古典園林には太湖石が飾られているが、宋代の陶谷が書いた「清異录」によると晋のときからだと記されているが、本格的に太湖石を庭園に飾って鑑賞したのは唐代になってからで、白居易が書いた「太湖石記」がその証左であるという。白居易の「太湖石記」には太湖石を「真官神人（仙人、道士）」や「玉盃」、「虬龍」、「鳳凰」のようだとしている。また、白居易が書いた「池上編」には石で飾った園林で隠遁したいという憧れがよく表れていた。27 日に寄った「唐少傅白公祠」では、このような白居易に関する諸資料に接することができた。

蘇州の中国古典庭園には池・石・木・橋・亭の五つの要素が組み合わせられており、ま

た奇妙な形をした太湖石が使われている共通点があるが、それぞれ動静あるいは豪華さとわびさびの要素の塩梅によってまったく異なる雰囲気を出していた。また、庭園の名前や楼閣、建物の名前には隠遁世界や桃源郷をイメージして、隠逸世界を詠んだ詩句からとって名付けており、詩題に呼ばれた名所・詩句を庭園の中に具体的な造営物として再現していることが今回の調査でよくわかり、大変有意義な調査となった。